

北欧アイデンティティとしてのルーン文字

北欧人に共通するアイデンティティの1つに、自分達はヴァイキングの末裔だという意識がある。8世紀末から11世紀半ばにかけて北ヨーロッパ全域でアクティヴな活動を行い歴史に名前を残したヴァイキングの存在は、北欧人にとって一種の誇りである。現在の北欧人と関わるならば、生活のさまざまな場面でヴァイキングの話題がでてくるだろう。

このヴァイキングは、他のヨーロッパ諸国とは異なる文字を利用していた(図1)。ルーン文字である。2世紀頃、ラテン・アルファベットをもとに考案されたルーンは、ゲルマン世界で広く用いられたが、8世紀頃を境に主たる利用範囲が次第に北欧世界に限定された。しかしヴァイキングによる拡大が収束しキリスト教世界へと移行する12世紀には、北欧世界でも、西ヨーロッパの標準文字であるラテン・アルファベットが大勢を占めるようになった。ヴァイキングの文字は、いったん、大枠としては忘却された。



図1 大イェリング石碑

●**ゴート・ルネサンスの時代** 16世紀以降、ルーンは再発見された。その前提として、北欧で生まれたゴート・ルネサンスがある。ゴート・ルネサンスとは、北欧とりわけスウェーデンの祖先は、他のヨーロッパと異なるゴート人であり、そのゴート人こそヨーロッパ最古の民族集団であるとする、民族主義的ナショナリズムである。そしてそのゴート人が用いた文字がルーン文字である、とされた。このような言語・文字と民族的起源を並行させて歴史の古さを論じる語りは、同時代のヨーロッパ各地で展開された言語起源論の一類型である。

ゴート人の歴史の古さをことあげする文献は中世より書き継がれていたが、とりわけヨハネス・マグヌス(Johannes Magnus, 1488-1544)とオラーウス・マグヌス(Olaus Magnus, 1490-1557)の兄弟による著作の影響は大きかった。プロテスタント国となったスウェーデンとデンマークでは、民族アイデンティティの源泉であるルーンに対する関心が王権や知識人の間で高まった。スウェーデンでは国王に近侍したヨハネス・ブレーウス(Johannes Bureus, 1568-1652)が、ゴート人の歴史と結びつけたルーン解釈を進めた。北欧内でも集中的にルーン石碑が残されているスウェーデンのルーンテキストを収集したブレーウスは、とりわけ晩年には、ルーンに対する神秘主義的解釈を試みるようになった。他方デンマークでは、デンマーク王権によるキリスト教化を証言するイェリング石碑の再

発見なども後押しする中、医師オラーウス・ウォルミーウス(Olaus Wormius, 1588-1654)によるルーンの収集と研究が進められた。ルーンを含むノルウェー=デンマーク連合王国の古異物を解説し、ルーンの起源を議論するウォルミーウスの一連の著作は、ルーンを科学的に研究する作業の端緒となった。

●**文献学の時代** 19世紀はナショナリズムと文献学の時代でもある。ヨーロッパ各国では自らの民族的起源と特性が認められるとする中世以前のテキストへの関心が高まり、各国ごとに歴史史料叢書が次々と刊行された。北欧諸国においても同様の動きが認められるが、なかでもルーンは格別であった。

19世紀の学問作法に準拠した初めてのルーン学手引書は、デンマーク人のルズヴィ・ヴィマ(Ludvig F. A. Wimmer, 1839-1920)による『ルーン文字』(1874)である。研究手法の確立に合わせてヴィマはデンマークのルーンテキストを刊行した(『デンマークのルーン遺産 [De danske runemindesmærker]』, 1893-1907)。その後ノルウェーではS. ブッゲ(Sophus Bugge, 1833-1907)が(『宗教改革にいたるまでのノルウェー碑文 [Norges indskrifter indtil reformationen]』, 1891-)、スウェーデンではS. スーデルバリ(Sven Söderberg, 1849-1901)とE. ブラーテ(Erik Brate, 1857-1924)が(『スウェーデンのルーン碑文 [Sveriges runinskrifter]』, 1901-)、両国の全テキストを網羅する校訂版を企画した。デンマークではヴィマの後にも、E. モルトケ(Erik Moltke, 1901-1984)とL. ヤコブセン(Lis Jacobsen, 1882-1962)の新しい校訂版が完成した(『デンマークのルーン碑文 [Danmarks runeindskrifter]』, 1941-1942)。

●**21世紀の展開** 20世紀を通じて基本的なテキストの校訂はほぼ終了し、ルーン研究は次の段階に入っている。第1に電子化である。最大の功績はRundataと呼ばれる全テキストを検索できる無料プログラムの開発である。加えて標準校訂版のPDF化(スウェーデン)やルーンテキスト内の単語検索システムの開発(イギリスとドイツ)を挙げることができる。世界のどこにいてもほとんどのルーンテキストに触れることのできる体制がすでにある。第2に国際共同研究である。電子化によるデータの共有を促進剤として、北欧三国だけでなく全世界の研究者が集うことのできるフォーラムが築かれている。4年ごとの国際ルーン会議とルーン専門雑誌 *Futhark* は目に見える成果であろう。第3に歴史テキストとしてのルーンの利用である。20世紀のルーン研究は基本的に文献学者・言語学者によって担われてきた。しかし21世紀に入り、従来の文献学的成果をベースとして歴史学者が積極的にルーンを利用するようになってきた。ヴァイキング研究だけでなくリテラシー研究や社会史研究にも不可欠のマテリアルとして、今後とも開拓されてゆくだろう。

[小澤 実]

□ 参考文献

[1] Barnes, M., 2012 *Runes: A Handbook*, Woodbridge, Boydell.